

# 乳児の最善の利益を考慮する専門職の視点

## —— インクルーシブ保育に着目して ——

保田 恵莉

### I. 研究背景と目的

こどもを巡る社会や環境の変容とともに、保育所や幼稚園、そして新たに設置され増加傾向にある認定こども園に対する期待が高まっている。それら求められる期待の一つに「保育者・教師の専門性」が挙げられる。

専門職の立場からはこどもの幸せを願うことを念頭におき、教育にあたってはいるが、保護者の求められる「質の高い保育者」には手が届かない想いを持つ保育者が要することも近年の保育者自身の仕事が続かない問題の側面となっているようである。

今後さらに、丁寧なこどもへの愛情の掛け方を具体的な保育場面から見直し、乳児からの健やかな成長の一助となる専門職としての役割と課題が必要となるように思う。

本稿では、昨年度よりこのテーマを達成することから、インクルーシブ保育に着目し、保育の考察をしている。インクルーシブ (inclusive) には「包括的な」「すべてを含んだ」といった意味があり、いま求められるホンモノ保育に共通する教育の考え方と思われる。

このことに関連する思想として例を挙げると、イタリアの女性医学博士 Maria Montessori (1870-1952) は、幼児教育・モンテッソーリ教育法の開発者として、20世紀初頭に「こどもの心を重んずる新たな思想」を提唱し、乳幼児教育はそれまでとは異なるこども中心の道を歩む方向に立ち、世界的に影響を及ぼしている。

マリア・モンテッソーリのこどもへの観察は科学者の視点から「こどもをよく観ること」が徹底していた。慈しみ深く保育の原理を重んじながら、神の導きをも取り入れた「包括的な」意味を持ち、次のように語っている。

『こどもの創造は神により支えられている。そして私たちには愛と援助することが残された。その観点に立ってこどもを尊重する必要がある。つ

まり、こどもたちが成長発達する過程で遭遇する無数の障害物から彼らを自由にし、彼らが生きることを援助することである。この原理が十分に理解されるなら、こどもに対する大人の態度の根本的な変化が生じるに違いない<sup>1)</sup>」。

マリア・モンテッソーリは、こどもの創造が生まれる環境を重んじ、善悪の手本となる大人の姿勢を求めた。そして、乳幼児の育ちにこどもを包み込む大人の役割が非常に大きいということを指摘している。

それでは、次に日本の国の教育の動向に立ち返り、教育（保育）についても少し具体的に考えてみることにしよう。

教育の動向では、平成29年度に新たに幼稚園教育要領、保育所保育指針が告示され、職員の資質向上と質の高い保育を提供することが求められている。

その一方、「幼児の最善の利益を守るには何が大切なのか」、「保護者と子育てにかかわる家族を保育現場で十分に支えることができるのか」など、教育課程に係る教育時間終了後の指導計画についても、具体的な指導計画と内容を考えなければならないことが明確化されてきた。

幼稚園においては、教育課程に係る教育時間の終了後等に行う教育活動は教育活動である。従って、その計画性が必要とされる。その際、幼稚園全体の教育目標が達成されるよう、教育課程との関連を考慮する必要がある。「預かり保育」「延長保育」等と呼ばれる活動については、先に降園した幼児が家庭や地域で幼稚園とは異なる体験をしていることを考慮して、作成する必要がある。

保育者がまず配慮しなければならないことは、「幼児の健康と安全について」である。こどもに対しては、落ち着いた心安らく環境を提供することが必要である。心身の負担が少なく、無理なく過ごせるように、環境を工夫し、個々の幼児の状況に応じた配慮が非常に重要であるだろう。

特に、入園当初は、幼稚園生活に対して不安感や緊張感が大きいため、家庭との連続性を図りながら一人ひとりの実情に合った居場所づくりが必要となる。

教育課程に係る教育時間終了後の指導計画においては、教育課程に基づく活動を考慮して、幼児期にふさわしい無理のないものになるように配慮したい。例えば、教育課程に関わる活動が身体活動中心である場合は、預かり保育の際には個別の健康状態に配慮して、幼児がゆっくりと休める時間と場をもつことが必要となってくる。さらに、家庭生活と同様に、適宜休息がとれ、おやつを食べたり、DVDを見たり、異年齢児と関わって遊ぶ等、自然で温かな家庭的な

環境や生活を提供することが望まれてくるように思われる。

これらのような時代の変容に即した営みとこどもの心身に対する細やかな配慮ができる保育者が「質が高い」と言われる社会的な「専門職」の核であると推察される。

本稿では、乳児の最善の利益を考慮できる保育と保育者の視点を明らかにし、専門職としての責務について探って行きたい。

## Ⅱ. インクルーシブ保育の価値

インクルーシブ保育とは、年齢・国籍・障害の有無にかかわらず、どんな背景を持った子どもも受け入れるという乳児の最善の利益を考慮できる保育を指している。

国連総会において採択された「障害者の権利に関する条約 (2006.12)」においては、以下のように記されている。

### 第二十四条教育

1. 締約国は、教育についての障害者の権利を認める。締約国は、この権利を差別なしに、かつ、機会の均等を基礎として実現するため、障害者を包容するあらゆる段階の教育制度 (inclusive education system at all levels) 及び生涯学習を確保する。

一般的には障害の有無によって学ぶ環境が分けられていることが多いが、障害が有る、無しにかかわらず、誰もが個々の違い、個性を認め合いながら共に学ぶことを目指すのが、インクルーシブ教育の考え方である。

障害だけを特別扱いするのではなく、子どもたち一人ひとりに「違い」があることを前提にした教育の在り方とも言われている。

インクルーシブ保育は、導入にコストや従業員の専門的な知識、スキルが必要なことから、導入は一部の限られた保育施設に留まっているのが現状である。

正しい援助がなければ、こどもはできないことへの劣等感を抱くようになることも予想される。さらに、保育者が、より多くの支援が必要な子どもにつきっきりになりかねない。

「違い」を認め合うまでには時間がかかるかもしれない。正しい援助がなければ違いを認められずに衝突が生じることもあるように思われる。また、活動内容によっては物足りなさを感じる子も出てくるであろう。

インクルーシブ保育にはこういったマイナス面もあるのだが、ここでは日本の国に基礎的に安定した統合教育（インテグレーション）教育が存在していることと比較し、以下を述べることにしたい。

インテグレーション教育が障害の有無を区別した上で同じ場で教育を受ける教育のことを指し、特別な援助を受けるのは障害のある子どもに対してだけなのに対して、インクルーシブ教育は、障害の有無にかかわらず、すべての子どもが個々に必要な援助を受けながら、みんなが同じ場で教育を受けるという教育である。このことは、インクルーシブ保育がわが国の先進的な教育と述べられるのではないのだろうか。

しかし、インクルーシブ保育を実践するには、それぞれの個性に対する十分な理解や、適切な支援が不可欠である。人員体制や職員の理解、知識が不十分であれば、単に同じ経験をすることを強要するような保育になってしまうことも考えられる。こども良い環境の基にのびのびと成長することが難しくなる危険性も考えられる。また、保育士には、高い専門スキルや幅広い知識が必要になる。

保育士の資格のみでは対応しきれない部分があるより綿密な指導計画を練る必要がある必要やトラブルに対してより敏感になる必要があるだろう。

保護者対応が難しいケースもある前例が少ないため新任保育士にとっては、インクルーシブ保育の環境に慣れるには先輩保育士以上に時間と努力が必要であるように思われる。

さらに、保育者としてのスキルアップ、こどもの育ちのために学び続ける姿勢がなければ、インクルーシブ保育の実践は難しい。

インクルーシブ保育は導入例がまだ少なく、日々の経験のなかでは前例にないことも多いように思う。職員同士で連携を取って、日々課題を解決していく姿勢も不可欠と言えそうである。

インクルーシブ保育の価値（効果）について、次のように図に示した。

こどもは、それぞれに「違いがある」ということを知ることができる多様な人とのかかわり方を学べる「違い」からさまざまな刺激を受け、成長につながる思いやりや相手を尊重する力が身につく分離から無意識に作り出される偏見や差別がなくなる。

インクルーシブ保育では、年齢などが近いグループの中ではできなかったような経験を積むことが可能である。

こどもは、「違い」が当たり前であるという環境に身を置くことで、立場の異なるこどもとの関わり方を学び、相手を思いやることや、相手の考え方を尊

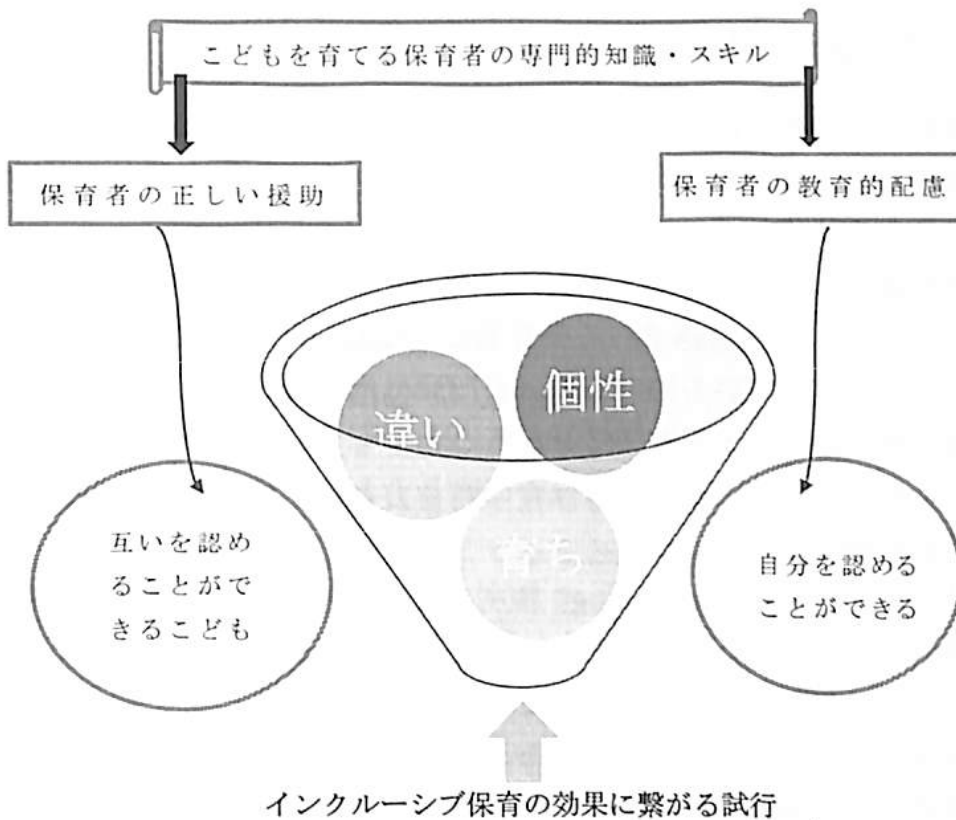


図1：インクルーシブ保育が求める保育観（筆者作：2020.9）

重することを学ぶことができるように考えられる。

私たち大人が無意識に持ってしまう偏見は、幼いころからの分離から生まれている部分も多くあるであろう。こどもの個の「違い」を認め、共に成長するための環境においては、潜在的な差別や偏見が生まれることを防ぐという将来的な善さが含まれている。

さらに、保育者は多様な子どもたちの保育に携わるなかで高い保育スキルを身につけられる療育や医療的ケアなど、知識の幅を広げられることが予想される。

こどもの成長から多くを学べる保護者に感謝される社会貢献になる将来的なニーズが大きい一方、教師は、さまざまな障害に対する支援の方法を学び、支援に必要な資格を取得するため、勉強の機会を設けるなど、幅広い学びのスキルを習得することができるであろう。

インクルーシブ保育の場合には、こども同士の関わり方、保護者への対応方法なども通常の保育とは大きく異なってくる。具体的には、こどもと共に過ごす日々の生活や経験の一つひとつが教師の学びのスキルとして蓄積され、仕事への遣り甲斐にも繋がっていくことが望まれるように思う。

### Ⅲ. 乳児の最善の利益について

保育指針や児童福祉法で言うところの「最善の利益」とは、何を述べているのかというと、この世に生命を受けた赤ん坊が一人の人権者として健やかに成長できることを意味している。

保育者の専門性による環境や配慮は、「福祉の増進」に値するものではないかと考えられる。「増進」とあるべく保育者は国家資格者として専門性を向上、増進させる義務を負っているのである。専門職に携わるということは、福祉（保育）の専門性を掲げ、国家資格者となることをも意味している。

では、こどもの権利を尊重する保育の在り方とは、乳児の最善の利益とどのような繋がりがあるのだろうか。

大人はこどもの幸せ（well-being：権利の尊重と実現）を目指している。こどもの最善の利益を第一義的に考慮し、生まれてから間もないかけがえのない乳児期における子どもの権利を尊重する教育を心掛けていく。そして、子どもたちに自立のこころを育てていくのである。

ここで述べる「こどもの権利」について、さらに具体的に模索していくと、「こどもの権利条約」が浮かび上がってくる。本稿では、重要な事項を取り扱いながら、保障されるべき機会や場について、保育者研修会（令和2年6月：オンライン研修）による資料「参考：平成30年3月に発行された社会福祉法人京都社会福祉協会一部資料を基に必要な事項をまとめ、次に示した。

すべての子どもたちは、出身国や外見上の違い、性、ことば、家庭環境、障がいの有無などによって差別されることなく、子どもとしての権利を尊重、保障されます。

子どもの権利条約：第2条「差別の禁止」

大人は、大切だと思われることでも、無理にこどもに強制せず、こどもの声に耳を傾けて柔軟な対応を心掛けることが大切である。体罰（子どもたちを傷つけ、思いや考えを表す機会を奪う）は、決して行わないこと。

また、こどもには、「今は話したくない」「話せないでいる」、「したいとき」「したくないとき」という気持ちのときがある。そんなときには大人が強く問い詰めないこと。「できるか、できないか」ととらわれず、子どもの頑張ろうとする気持ちや課題、目に見えない心の育ちを多面的に支えていくことがとても大切なことであることに気付くようにすること。などのことが乳児を一人の人

間として尊重することにも結ばれている。

すべてのこどもは、命を大切にされ、可能な最大限の発達を保障される権利をもっています。私たちは、乳幼児期にふさわしく、休息したり遊んだりする機会を保障します。

こどもの権利条約：第3条「子どもの最善の利益」、第6条「生命・発達への権利」、第31条「休息、余暇、遊び、文化的・芸術的生活への参加」

こどもが十分に、また、安全に遊び生活できる環境を保障し、遊びを中心とする心の安定をもたらす生活を大切にすること。さらに、日々の生活の全てにおいてこどもの自主性を大切にし、楽しく食べる、心地よく眠り休息し、目覚める、着替える、排泄することの心地よさを保障することが重要なことである。

すべてのこどもは、自由に自分の思いや考え（view）を表す権利をもっています。それは、言葉にならないことばも含めて「声を聴いてもらう権利」でもあります。そうした思いや考えは、こどもの発達に応じて充分考慮されなければなりません。

こどもの権利条約：第12条「意見表明権」、第13条「表現・情報の自由」

すべてのこどもの声を封じる命令や禁止語（「しなさい」、「だめ！」）は、極力使わず、こどもの声が返ってくることを想定した言葉（「しようね」、「一緒にしてみよう」）を心掛けて使うようにすること。また、こどもが「自分で選び、決める」機会を十分に保障する態度を示すことも忘れてはならない。こどもの眼差しや思いに共感し、丁寧に応えるように務めること。合わせて、こどもにとってよりよい保育を構築するために、職員同士も互いに尊重し合い、自由に思いや考えを出せる場を大切にするように務める。

すべての子どもはそれぞれにプライバシーの権利をもち、人に知られたいくないことを守られる権利があります。また、他者から自尊心を傷つけられない権利があります。

こどもの権利条約：第16条「プライバシー・名誉の保護」

個々のこどもが他者に知られたいくないであろうことは守秘を守ること。さら

に、こどもの前で保護者の否定的なことを話題にするなど、園児や保護者にかかわることを外部に漏らさないように気配りをする。愛情と敬意をもって、名前を呼ぶ。「名前を呼び捨てにしないこと」。それぞれの子どもの自尊心を傷つけるような言動は厳重に慎むこと。

例えば、他児と比べできないことを強調したり、人格を否定したりするような言葉を発しないように心掛けることも大切な要点である。

以上のことを専門職の視点に取り入れながら、次からは幾つかの「事例」を挙げ、テーマに迫る考察をしていくことを考えた。保育所や幼稚園、また認定こども園で問題行動を起こすこどもや気がかりなこどもは家庭での問題が反映されているように感じられる。

#### IV. 乳児の最善の利益を考察した事例

##### 事例①「乳児Kの無表情」

1歳2か月の女児「乳児K」は、0歳6ヶ月で保育所に入所し、短時間預かりの乳児である。両親共に共働き。少しずつ生活パターンには慣れてきたが、ぐずりがひどく、なかなか眠らず保育者に抱かれたまま眠ることが多い。一番に気がかりになることは、K児の顔の表情に笑みが見られないことである。「いないいないばあ」をしても他乳児と同じ場で音楽を聴き、リズム遊びを楽しんでもほとんど無表情のまま過ごしている。

「K児の無表情」の原因について、まず保育所内で話し合う機会を持った。担当保育士だけでなく、場面により多くの方がK児に関わり様子を見ていたため、様々な意見が出た。

K児と母親との関係性についても検証のなかでは、特に問題はないように思われたが、一度母親から家庭での様子、生まれてから現在に至るまでのK児の養育の様子について尋ねることになった。

休日の午前、母親が保育所に姿を見せられ、K児は他の保育者が預かりをする間、聞き取りを行ったが、母親は話しながら、大粒の涙をこぼされた。K児は両親の不仲の環境下で過ごしているようである。父親の暴力も時折あり、K児が安心して眠れない状況の日もあるようであった。K児に優しく語り掛けることが出来ていないこともわかった。そこで園長は、福祉に相談機関があることを伝え、母親とK児を救う支援の窓口を開くことを試みた。

今のままで子育てをすることは、K児がこころを閉ざして大きくなること。それは、言葉の発達にも感情の発達にも繋がっていくことが予想される。母親



が思い切って話をする事ができたことから、精神的な部分のケアが重要課題であることに園側は気付けた。

### ①-2 専門職としての視点から

専門職としては、幾つかのハードルを一緒に超えていけるように、一番に母親と信頼関係を築き、守秘義務に徹しながら、相談員の役割も果たすことが望まれる。そして、K児に母親の気持ちが常に伝わってしまうことから、母親に子育ての自信が持てる保護者支援をしていくことが重要課題となった。

K児には、自分が「愛される存在であること」「かけがえのない命であること」を、愛情を示すことから自然に伝えていけるような善い環境を提供していくことを考えた。

その後、5か月という長い期間がかかったが、成長と共にK児の瞳に好奇心の光が生まれ、その瞳の輝きが日ごとに増しているように保育者は感じているようである。声を上げて笑うことはまだできないものの、表情に喜びが伺えるようになれたことは素晴らしい成果である。K児の両親は離婚も視野に入れながら、仲介人を基に話し合いを持たれているようだが、父親の気持ちも徐々にほぐれ、K児を可愛いと思うようにもなって来られているように聞いている。

K児が大きくなって「生まれて来て良かった」と、ころから思える人になってほしい。そのために、0歳から就学前までを養護する保育者は、専門職として社会福祉の仕組みをしっかりと知り、保護者の指導も行えることが良いと考える。

### 事例②「乳児Fの叩き癖」

1歳6か月の男児「乳児F」は、保育園での生活が6ヶ月を経過し、少し安定も見られ、園でよく眠るようになって来ている。しかし、ここひと月間、奇声がひどく、保育士に抱かれていても突然叩く癖がついてきた。傍らで生活や遊びを共にする友だちにも急に叩くことが起こり、危険な場面も見られる。

そこで、F児の叩く行為に繋がる原因は何かを家庭と連携を取り、母親と一緒に考えるときを設けることにした。F児は、家庭でも抱っこしている母親を突然叩くことがあり、そんなときは「叱るようにしています」との声を聞いた。保育者は、母親に対し、「叩くことを叱るのではなく、どのようなときに叩く行為が起こるのかを考えてみてほしい」と、投げかけた。母親は母子家庭であるため、仕事が大変忙しく、2件のパートをこなしながらF児の養育に携わっているようである。そのようなことから、母親に無理のない様、二度、三度、降

園時迎えの際に話を聞く時間を設けた。

母親と話すなかから、F児は「イライラ」が起こった際に「叩く」という行為を示していることがわかってきた。その「イライラ」について、さらに具体的に考察していくと、F児には「もうちょっと待って」と、待たせることが多いことがわかってきた。園でもF児よりも先に友だちを優先しておむつを替えたり、食事をしたりすると、そこに至るまでに「イライラ」が発生しているのかもしれない。F児は言葉には上手くできないが、「自分を一番に見てほしい」という欲求が強く、大人の愛情を求めているような気がしてきた。

そこで、保育者は「F児と向き合う時間をたくさん作り、関わりを丁寧にしていく」という提案を行った。さらに、家庭と園とでコンタクトを取り合い、「F児の気持ちが安心し、安定するような眼差しと言葉を向けていくこと」を約束した。それから、常に大人側が笑顔を向けることは大切なことだが、時に厳しい表情を向けるなど、善悪が乳児にもわかるような誠実さを態度で示していくことも考えてみた。

この事例からは、専門職としての責務としてF児を育てることと同時に、母親が自信を得られ、子育てに喜びが持てるように導いていくことが必要であるように感じた。

2か月が経過し、不安な気持ちや自分の想いが伝わらないなかで、「人を叩く」という行為を表していたF児が少しずつ落ち着いた良い表情に変わってきた。

## ②-2 専門職としての視点から

事例から保育者はコミュニケーションの弱さが原因でF児の叩き癖が起こっていることを予想した。母親と話し合いを重ねる内にはF児の気持ちを代弁し、F児の想いに寄り添いながら「嫌なことを失くす」ということではなく、「嬉しいことを増やしていく」という風に考え、関わったことで、F児が安心し、喃語と動作でも表現できるようになったと思われる。

抱っこされるということは、乳児にとって居心地の良いことではあるが、一方では束縛を受けるといことが考えられる。また、友だちと玩具や場の取り合いを経験することは、こどもにとって自己主張の意志を持つことや自我を育てる上から大切なことと思われるが、F児には幼いなりの焦りや怒りが生まれる場面であったことが推察される。F児の想いが伝わらない気持ちから起こる叩き癖については、その場の環境と遊びの内容構成を再考し、F児が安心して遊べるようにする必要性を感じる。

伝え合うための言葉が上手く使えない乳児Fに対して、「Fちゃんは、〇〇し

たいのね」「そう、いまはだめなのね」と、優しく受け止め、共感しながら促しを繰り返すことも大切なことであると考え。言葉で伝えるだけでなく、「叩くとびっくりするよ」「叩くと痛いから」ということを相手の立場から少し思考できるような投げ掛けを行うことも効果的であるだろう。

ここでは、「伝えたいことがあるが上手く伝えられない」というもどかしさを全て受入れた上で、F児を愛する姿勢が専門職にはとても大切なものであることを伝えたい。

そして、専門職である保育者は、F児が「周囲大人から大切にされている」という満足感を得ながら成長していったほしいと願うころを持つことが何よりも大切なことである。

## V. 乳児の生きる力とインクルーシブ保育

現代の日本の国では、「学びと育ちの連続性」を見通した乳幼児期の保育・教育が考えられており、乳児から幼児、そして保幼小へのステップだけでなく、後の中学校・高等学校へもつながる「連続性のある子どもの育ち」が期待されている。生き生きと遊べる環境をもっと子どもの身近に置き、主体的で協同的に遊ぶたくましい子どもを育てるにはどのような研究にとり組んでいくべきかを踏まえ、各園の試行錯誤の基に研修が積み重ねられてきた。それらのことを踏まえ、ここでは、より具体的に乳幼児を育成するカリキュラムなども取り入れたインクルーシブ保育（年齢・国籍・障害の有無にかかわらず、どのような環境や背景を持ったこどもを受け入れる保育）について、述べることにする。教師の専門性を生かした研究から、未来を担うこどもを育成するねらいと共に、子育て支援の柱となるよう、具体的な指導計画を作成し、こどもの成長を期に照らし合わせていくことが望ましい。

### V-1. 個の違いを見据えた指導計画

未来を担う乳児を見据えた指導計画は、保育における基本的な原則に加え、今日的課題を押さえることが求められる。「個にふさわしい教育」「環境を通しての教育」「遊びを通しての総合的指導」「体験の多様化と連続性」を基に、保護者による保育ニーズにも対応していくことが期待されている<sup>2)</sup>。教育課程の連続性、一貫性、柔軟性という観点から、長期的な指導計画と短期的な指導計画は深い意義を持つものである。

こどもは、それぞれに「違い」がある。そのことを保育者が基礎に持たなけ

れば、インクルーシブ保育は実践不可能である。

こどもは、個々に興味をもって自ら進んで行なう活動において困難を乗り越え挑戦しようとする。そしてやり遂げた時、満足感や充実感を味わうのである。そうした経験を積み重ねることで、「もっとやってみたい」、「この次はこうしたい」という意欲を湧かせる。このような子どものありようを倉橋惣三は「自己充実」と呼んでいる。保育の基本はインクルーシブの視点と同時に、こどもの「自己充実」を促すものでなくてはならないと考える。

こどもの活動を誘発し、子ども自らが活動に取り組もうとするなかから、個のこどもが自己の目的や課題を見だし、挑戦していけるように配慮する必要性を踏まえ、長期から短期へと、生活が連続的に繋がるように指導計画を用意していくことが必要となっていく。

インクルーシブ保育の指導計画は、各園で立案される保育のよりどころである。教育課程の実施は、具体的な指導計画に基づいて進行する。指導計画は、各園の教育課程を基盤として、その具体化の過程でこどもの育ちが促されていく。こどもの発達に寄り添う生活を展開し、その子なりの輝きが発揮できるような指導計画でなければならない。

長期計画と短期計画をリンクさせる視点、日々の幼児の姿を踏まえる柔軟性、保育を絶えず振り返りながら次の生活に繋げようとする真摯な姿勢が保育者には求められる。もっとも大切なものは、母性愛に満ちた保育者の存在である。

我が国の乳幼児教育では、新教育要領・保育所保育指針の告示と共に、さらに教師の資質向上と質の高い保育を提供することが求められている。その一方、「幼児の最善の利益を守るには何が大切なのか」、「保護者と子育てにかかわる家族を保育現場で十分に支えることができるのか」など、教育課程に係る教育時間終了後の指導計画についても、具体的な指導計画と内容の見直しが重要となっていくのである。

## V-2. 後伸びするこどもの可能性

0歳から大人の愛情が注がれ、安定した環境で育った乳児のなかにも言葉の遅れが見られる、動きの鈍さを感じるなど、気がかりなこどもと出会うこともある。しかし、周囲の大人は焦ることなく、じっくりとその子の個性に向き合うことが良い。こどもは、赤ん坊の頃から未知の世界に伸びて行く可能性を持っていると信じるころが重要である。いま、眼に見えない成果は、後に伸びていく。後伸びを楽しみにした焦りのない子育ての支援となるよう、温かく親子を包み込むような保育者の役割が今後益々期待されていくであろう。

次に、育ちの word を 6 枚の花びらに表した。

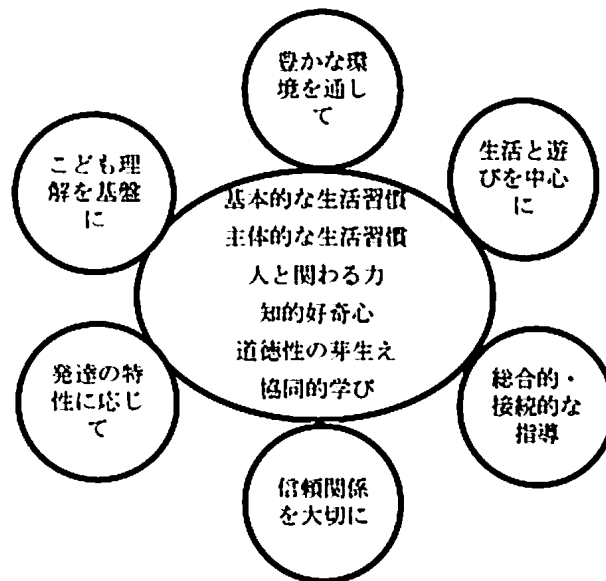


図2：インクルーシブ保育が求める個の育ち（筆者作：2020.10）

## VI. 総合考察

こどもにとって社会福祉施設である園は安心でき、人権が守られる大切な場所である。こどもが穏やかに安心して毎日を過ごせることは保護者にとって大きな支えとなると考えられる。

インクルーシブ保育は、意識して見渡すと我が国の保育所・幼稚園・認定こども園・施設でも実践されていることが見えるであろう。

一人ひとりのこどもの違いを大切にし、その子が生活しやすい環境を造ることやこどもを巡る全ての人々が共通理解を得ながら育ちを見守っていくことが改めて重要なことがわかってきた。

保育者は手を差し伸べ合いながら保護者の子育てのより良きパートナーとなれるように日々努力しているが、保育に関する専門知識や技術に関しては、都度の研修も必要であるだろう。

複雑多様な現代の社会現象のなかにおいて、孤立する母親が増えていることも確かなことであり、「乳児の最善の利益」を考慮した際には、教育が悩みを抱える母親の心地よい居場所となれるよう務めていくことが重要であると考えらる。

同時に、専門職と言われる保育者は、不完全な自分を自覚すると同時に、周囲に支えられている自分を自覚することが要る。

そして、乳児の最善の利益を重んじ、生命の誕生からこどもをまっすぐな人に育てるために、胸に温かな明るい保育の光を灯しながら、専門職としての視点を明らかにすることが望まれる。

#### 引用文献

- 1) 前之園幸一郎 (2014) 『モンテッソーリ教育における宗教とこども』日本モンテッソーリ協会学会誌第47号 pp.69-70 (Op.cit. a cura di L.De Sanctis, p.43.)
- 2) 鈴木昌世・佐藤哲也 (2012) 『子どもの心によりそう保育・教育課程論』福村出版 p. 101

(ABSTRACT)

**A professional perspective that considers  
the Best interests of the baby**  
—— Focusing on inclusive childcare ——

Eri Yasuda

**Summary:** What is the best interests for a child? This question continues to be asked socially. In recent years, the education from the age of 0 has begun to be reviewed. Nursery teachers have been searching for what is the best interests of such children.

Nursery schools that take care of young children for many years support the welfare of children and the employment of parents. However, raising children in various environments is becoming more difficult year by year.

Inclusive childcare provides an environment where children can be accepted and grow together without eliminating differences. In this paper, I would like to reiterate the importance of the best interests of babies from a professional perspective amid the rapid social advancement of women and the decline in the birth rate.

**Key Words:** Best interests of the baby    Inclusive childcare  
Differences between children    Profession